



神道について

神道では、自然界にある木や水などに、八百万の神、つまり数多くの神さまが宿っていると考え、敬意を表してお祀りし、感謝してきました。木1本1本に魂があるという考えなので、どこの神社でも木を切らず、大事にします。神社の背後にそびえる山をご神体として、立ち入ってはいけない清浄な場所と定める神社もありますが、それは、私たちがいろいろな所を踏んだ足で入るのは神さまに対して失礼だと考えるためです。

神道では自然物に神さまが宿ると考える一方、仏教では自然の木や水に魂があるとされます。言葉の違いはあれど、人間が何かを感じ取っているという意味では同じだといえるでしょう。例えば、この龍穴神社にいて、水が流れていて、清々しく心が洗われるように感じますが、そういった素直な感覚が大事なのだと思います。そういったものが神さまとか魂とかいったものにつながっているのでしょう。

私たち人間は自然からいただいております。そんな私たちがお返しできるのは感謝だと思います。

水は、農作物を作る一方で、台風などの災害をもたらします。神道では、良い面は神さまのおかげであり、悪い面もまた神さまのおかげとして、できるだけ和らげるためにお祈りします。良いところも悪いところも受け入れた上で、神さまに感謝し、どうぞ気持ちを治めてくださいとお祈りするのは、すべてを受け入れるという、日本人独特の考え方もかもしれません。海外では一神教、つまり1つの神さまが多いですが、日本では神道も仏教もあり、お宮参りは神社で、お葬式はお寺ですなどということが多々あります。

神社というのは、その地域の氏神さま、つまり地域を守ってくださる神さまを祀る場所ですから、すごく大切です。昔は人々が語り合い、コミュニケーションを取る場所、喜怒哀楽を示す場所でもありました。現代では人と人のつながりがすごく薄くなり、そういった面では昔のほうがよかったですと思います。私は宮司として、ゆとりのあった時代を思い返しながら、地域の人たちのために龍穴神社をできるだけ守っていきたくて考えています。

龍穴神社 神田達也宮司インタビュー 出典：リンダ・ホーランド監督 『江戸アバンギャルド』2019年
アメリカ・日本)



森徹山 《水辺群鳥図》 インディアナポリス美術館 (ニューフィلز)